

# コーラス

2005(平成17)年5月21日鑑賞(ホクテンザ2)



監督・脚本・脚色・台詞・音楽＝クリストフ・バラティエ／製作＝ジャック・ペラン、アーサー・コーン、ニコラ・モヴェルネ／音楽＝ブリュノ・クーレ／合唱団＝サン・マルク少年少女合唱団／出演＝ジェラルド・ジュニョ／ジャック・ペラン／ジャン＝パティスト・モニエ／マクサンス・ペラン／フランソワ・ベルレアン／カド・メラッド／マリー・ビュネル(日本ヘラルド映画配給／2004年フランス映画／97分)

……タイトルどおりの少年合唱団の美しい歌声がテーマだが、「池の底」と名付けられた不良少年たちを集めた学校の寄宿舎の中からこんな見事な合唱団が生まれたことが面白い。少年たちを導いた音楽教師は、地位と名誉に固執する校長とは正反対の、心から音楽を愛する誠実で心やさしい中年男。日頃のささくれだった世相(?)の中、美しい歌声など忘れてしまっているあなたも、13歳の天才少年ピエールのすばらしいボーイソプラノを聴けば、少しは心が洗われるかも……? 少なくとも私は、思わず小学校4年生の時の少年合唱団の自分に戻っていたが……。

## 1枚の写真がつなぐ人間の心

この映画における最大のポイントとなる小道具は、1枚の集合写真と1冊の日記。写真に写っている子供たちは「池の底」合唱団のメンバーで、そのほぼ真ん中に立っているのがピエール。そして前列の真ん中がペピノだ。こんな2人が50年ぶりに再会した時、ペピノがピエールに見せたのが1冊の日記。

この日記こそマチュー先生の書いたもので、そのマチュー先生は集合写真の右端に微笑みながら立っていた。そして、マチュー先生の日記には、ピエールを中心とした合唱団の思い出がいっぱい……。さあここから映画は一気に50年前にさかのぼっていくことに……。

## ピエールは13歳！

この映画で「天使の声」ともいふべきボーイソプラノの声を聴かせるのは、3000人のオーディションの中から選ばれたジャン＝パティスト・モニエ。「池の底」寄宿舎の少年合唱団は、不良生徒23名によって構成されていたが、ピエールは、ただ1人ソロの部分进行を歌うため、抜群の歌唱力を要求されるうえに、「顔は天使だが心は悪魔」と言われるほどの問題児の複雑な心を表現する演技力も要求されるという大変な役。その役柄を立派にこなしたモニエは、13歳にはとても見えないような端正な顔立ちで長身の男の子だが、その声はまさに天使の声そのもの。彼の登場がフランスで一大ブームを引き起し、数多くのフランスの雑誌のトップを飾ったのも当然だろう。ウィーン少年合唱団に勝るとも劣らない(?)「池の底」合唱団を演じた「サン・マルク少年少女合唱団」に拍手！

## かつてはオレも少年合唱団！

カラオケ大好き人間の私は、最新ヒット曲から昔の歌謡曲、そしてナツメロから軍歌まで何でもござれのヘンなおじさん……？ カラオケ好きの人は多いが、好きな歌や現実に歌う曲の傾向はワンパターンの人がほとんど……。それに比べれば、私のレパートリーの広さは、自慢じゃないが月とスッポン……？

そんな私となった最大の原因は、歌に対して「ママなこと」だが、その前提としてはやはり幼稚園や小学校低学年の時から、多少なりともいろいろな楽器を習ったことがあるうえ、小学校4年生からは少年少女合唱団へ入ったことが大きいはず……。NHKでは今も続いているが、私が小学校4年生となった1960年頃には、全国規模での少年少女合唱団のコンクールがあった。これが「NHK全国学校音楽コンクール」で1932年に「児童唱歌コンクール」としてスタートしたものだ。私の母校である八坂小学校はいつも地区予選で敗退していたものの、そこに出場するための合唱団での練習は結構ハードで合宿まであった。とはいっても、ほとんど遊んでいるようなものだったが、それでもこの時の厳しい(?)練習が私の音感教育に大きく寄与したことはまちがいないはず。

中学校からは中高一貫教育の進学校である愛光学園に入学したため、残念なが

らそれ以降、正規の音楽学習(?)を自主的に放棄したことが、今となっては実に残念……。中学時代、勉強は半分落ちこぼれ状態だった友人と、大学生となって帰省中の松山で出会った時、彼は当時のフォークのヒット曲を自由にピアノで弾いていたが、オレだって中学生時代にもう少し真面目にギターをやっていたら……？

### こんな先生がいたらいいナ……

落ちこぼれ少年ばかりを集めた「池の底」に新たに赴任してきたのは音楽教師兼寄宿舎の舎監となるクレマン・マチュー（ジェラルド・ジュニョ）。彼を最初に閉じられた校門の中から迎えたのは、「土曜日には迎えに行く」と言い残して去った両親をひたすら待っている少年ペピノ（マクサンス・ペラン）。そして学校内を案内し、マチューを校長のラシャン（フランソワ・ベルレアン）に紹介したのは用務員のマクサンス（ジャン＝ポール・ボネール）。ところが赴任1日目から悪ガキたち(?)は大変な事件を……。彼らの「いたずら」によって、このマクサンスは左目に大ケガを負ってしまったのだ。校長は直ちに全生徒を召集し、「犯人は自首しろ。知っている者がいたら告発しろ」と要求。しかし……。そこからくり返されるのは体罰また体罰という、この「池の底」特有の慣習だった。しかし心やさしいマチューは、たちまちこんな校長の方針に反旗を翻し、少しずつ「オレ流」を……。ホントにこんな先生がいたらいいナと生徒たちは誰もが思うはず……。

### 校長はホントにイヤな奴……？

マチュー先生のやさしさと対置されるイヤな人柄の人物(?)が校長のラシャン。私学にはさまざまな方針があってよいのだから、この「池の底」における校長の体罰主義・告発主義(?)の方針が必ずしも悪いわけではない。現に今のニッポンでは、内部告発を促すために内部告発をした者を保護するための法律づくりまでされているのだから。さらに、合唱団が軌道に乗り季節も春を迎えると、このラシャン校長さえも少し雰囲気が変わり、笑い顔を見せることも……。しかし、ある事件発生からは状況は一変。さてその事件とは……？

## 成果の横取りは……？

私はラシャン校長の教育方針にそれほど大きな違和感はなかった。しかし、合唱団のうわさが広がり、伯爵夫人がその歌を聴くために学校に来ることになると、突然ゴマすり校長になったり、「合唱団の提案をしたのはこの私です」と成果の横取りをするのは、さすがにいかがなものか……？ うまく伯爵夫人にゴマをすって、勲章まちがいなしとなったものの、その後、やはりこの校長は……？ ややはり、どこかで神サマは平等に人間の行いを見ているのだろうか……？

## 大切な才能探しとその生かし方！

「落ちこぼれ」ばかりを集めた学校に合唱団ができるなんて話はめったにあるものではない。また、基礎的な音感教育や楽譜読みも経験していない生徒たちが、たまたま歌が歌えたからといってそれ以上に伸びる可能性などあるはずがなく、これは非現実的な映画！と思う面はたしかに強い。しかし、やはり「隠れた才能」というのは必ずあるもの。そしてそれは、特に絵や音楽そして彫刻とかの感性の面によく表れてくるもの。もっともマチュー先生が合唱団をつくったもとの動機は、歌うことの楽しさを覚えさせることで子供たちを非行から立ち直らせようというもの。しかしそんな中で発見したピエールの才能は驚異的なものだった。そこでマチュー先生が考えたのはピエールの才能を開花させるためリヨンの音楽学校に進ませるといこと。母親のヴィオレット・モランジュ（マリー・ビュネル）にこの提案をしていくうち、いつしかマチュー先生の心の中にヴィオレットに対する恋心が生まれてきたのはご愛嬌（？）だが、才能の発見や発見した才能の生かし方はいつの時代も大切なテーマ。現在のような豊かな国ニッポンでは、埋もれた才能が発見されないケースは少ないだろうが、貧しい諸外国にはそれがいっぱいあるはず。また、日本への中国をはじめとするアジアからの留学生たちにもそんな埋もれた才能をもっている学生や日本人以上の努力を続けている学生がたくさんいるはず。そんな才能の発見とその開花という分野にドーンとお金と人材をつぎ込んでいなくなっちゃ……。そうしないと、将来の日本では、才能が枯渇してしまうのでは……？

2005(平成17)年5月23日記